

# 波 紋

Keio Fishing Club

34号 2009

## 目次

### No.1 2009年夏合宿@長野

—青木湖・鹿島槍・木崎湖—

### No.2 思い出の釣行&大切なルアー

### No.3 釣りの諸問題を考える

番外編 ルアー入門!

## KFC 夏合宿 2009

### in Nagano Omachi

長野の奥地、  
非日常を生きる。

**長**野県は大町市。KFC一大イベントともいえる夏合宿が今年はこの地で行われた。

夜行列車「ムーンライト信州」に揺られ、到着したこの地は自然豊かでまさに合宿にふさわしい場



「星湖亭」にて

に思えた。日程は3日間。青木湖でのポートバスフィッシング、鹿島槍ガーデンエリアフィッシング、そして最終日の木崎湖でのバスターナメントと続く充実した内容だ。

合宿はとにかく楽しい。日頃多忙な慶應生がそれぞれの日常を離れ、およそ都会では見ることのない大自然のなかで、遊ぶ。3日間遊びつくす。まさに非日常の生活だ。しかし、こんな非日常でしか感じ取れないものがある。手に入れることのできない何かがある。この3日間での各々の釣りを通して、メンバーのみんなもそれぞれ思うところがあったようである。ここではメンバーのレポートをいくつか紹介したいと思う。

## Day1 青木湖 For Small Mouth Bass

Angler 中川

**名** 前の響きから上質な列車を期待したにもかかわらず、それを完全に裏切られ「ムーンライト信州」で眠れぬ一夜を明かし、長野に到着した。

早朝の長野は寒い。寝不足と寒さの中、青木湖に到着した。静かな山道を進むと一面に湖が見えてくる。湖には朝陽が差し込み眩しく、周りの森と調和して幻想的な景色である。景色に感心しつつポート屋の裏で仕掛けをセットする。仕掛けづくりを終えた人たちの中では待ち切れずに棧橋からキャストをはじめの人たちもいる。さすがは釣りキチ集団、釣魚会。二人一組となってポートに乗り込む。僕は同級生にして野池マスターである市毛君と同乗することに。ルアー釣りの初心者である自分にとって大変心強いパートナーである。

まずは市毛君の決断により他のポートと反対の湖の右側のシャローを攻める。岸に沿ってキャストを始める。2、3投目にしりて市毛君にヒット！上がったのはウグイ。本命のバスではなかったものの早くも一匹釣れて幸先が良い。

その後スプーンを使うと小さなバスがおいかけてくるのが見えたので、しつこく投げ続けるとググッとアタリを感じる。上がったのは15センチにも満たないほどの小さなバスではあったが初めてバスを釣ることが出来、うれしかった。この後時間が迫ってきたので舟着き場に戻りつつ岸際を攻めると、先ほどと同じ位のサイズのバスを釣り上げた。ここで午前中の釣りは終了し、昼休憩を挟み午後の釣りが始まった。午後は湖の反対側を目指しつつ岸際を狙っていく。午前中と同じくトップの釣りで反応を確かめる。なかなか反応がないまま岸を移動していたが、倒木のあたりにキャストすると2、3秒後にぱしゃっとな音がしたが、うまくあわせることが出来なかった。

その後もいろいろとルアーを変えてみたり場所を移動したものの午後はこれだけとなってしまった。ただはじめてのバス釣りにしてバスを釣り上げることができ、今まで知らなかった面白さに気づいた。今回の合宿で身につけたことを、今後のバス釣りやその他の釣りに活かして楽しく釣りを続けていきたいと思った。



厳しい状況ながらも、ワームで手堅く1尾！

## Day2 鹿島槍ガーデン For Area Trout



鹿島槍のトラウトはやはり迫力が違う。

Angler 市毛

**二** 日目は管理釣り場でのトラウトフィッシング。場所は鹿島槍ガーデン、釣れる魚がどれも大きいことで有名であり、ここ最近、全国でも人気No.1を誇るエリアだ。周囲400Mの池が3つ、川を区切った小規模な池が3つ、加えて渓流エリアまであるという大規模なエリアである。事前の情報によると、人気のせいかプレッシャーが高く、かなり手強いエリアであるとのこと。不安と期待が入り混じる中の実釣となった。

当日は、朝8時頃からの釣行。単身、流れ込みへと陣取り、前情報に忠実に重めのスプーンをひたすら投げ続ける。時折、竿を持ち替え、普段あまり使用しないミノーも投入し、ただ巻き。が、双方ともに反応が薄い。

結局、ここまでスプーンで3匹のみ。釣ったというよりも、釣れてしまった、という感覚である。あまりにも釣れないので、流れ込みに溜まっている小型の岩魚に遊んでもらおうとミノーを流し、軽くジャークしてみる。するとどうだろうか！岩魚ではなく、ニジマスがわらわらと集まってくる！先ほどまでの沈黙がウソのようである！ニジマスはミノーではただ巻き、激しいアクションはご法度、と前情報を受けていた僕にとっては衝撃であった。どうやら前情報に踊らされすぎたようだ。その場の状況に合わせて臨機応変に対応し、魚と闘う。それが釣りであったろうに。



鹿島槍名物、アルビノ

これで目が覚めた僕はミノーを様々に動かしてニジマスの反応を見る。どうやら、病的なまでに竿をジャークし、ルアーがダートする時間を長く

とてやると好反応を示すようである。このイメージを持ち、遠投したミノーを泳がせる。しゃこん、しゃこん、しゃこん、ゴン！強烈なアタリだ！ファイトの末、あがって来たのは40後半のニジマス。ここで皆の様子見も兼ね、二号池を一周することとした。僕が移動している間にも多田君、飯田君、小野君が良型を上げている。他の方も魚をかけている。特にフライの柴さんはひどい。反則だ（笑）皆の隣にお邪魔しつつ会話をしながら僕も数匹上げると、また池一周の旅に出た。元の場所に戻る頃にはある程度、満足行く数を釣りあげることができたので、上の一号池へと移動。

一号池はほぼ貸切状態であった。80を越えるモンスターサイズやメーターオーバーの固体も泳いでいる！興奮してキャストを繰り返すも、反応は薄い。場所をこまめに換え、ルアーも変えながら攻めてゆく。半分以上攻めたところで、一匹のモンスターブラウンがすごい勢いでルアーへ突進してきた！が、反転。しかし、こいつは遠くへ逃げることなく目先10Mの所で止まった。これはチャンスだ。捕食スイッチの入ったモンスターが目の前にいる！こいつが何を捕食しているか分からないが、ルアーをニジマスに酷似したものへと変更。もちろん二号池の結果をひまえ、70のサスペンド。モンスターの後方5Mへキャストし遊泳開始！しゃこん、しゃこん、びた。しゃこん、しゃこん、びた。緊張が体を縛り付けるがルアーの動きは意地と根性でキープ。そろそろ奴の視界に入るぞ。うっ、隣を抜けた、と思った瞬間だった。奴が身をひるがえし、口を使った！「うおしゃあああ！ここだ！ここおおお！」絶叫しながらビシッビシッと二回、しっかりとフッキングを決める！伝わる衝撃、うなるドラグ！！とうとうかけた！だがしかし、こっからが勝負、と気を引きしめる！そうして僕が竿を握りなおした時である。モンスターは凄まじいパワーで僕の体を引きずり、水中には土煙が立ち込めた。瞬間、何か僕の頬をかすめる。・・・僕のルアーであった。またしてもバラしてしまったのだ。確認してみると、また針が伸びきっていた。本当にこの魚は強い。

結局、僕は最高が50UP止まり。みんな60UPへ届かなかったが、書き出したら止まらない程、このエリアで遊ぶことができた（柴さんだけ、こっそり70UPを釣り上げていたことを後に知る。ちくしょう！）。

## Day3 木崎湖 For Bass Tournament

Angler 飯田

**夏**の合宿3日目となる8月5日は木崎湖でのバスフィッシング大会であった。前日までの天気予報は外れ、太陽が照りつける夏空の下での開催。朝7時、ボート屋である星湖亭さんから出船。今回の大会では、2人1チームが1隻のボートに乗り、4チームでの争いとなった。出船前に星湖亭さんで情報を伺ったところ、シャローであれば数は釣れるらしいが型が小さく、ビッグサイズを狙うには6~7mのディープを狙うのがよいとのこと。今回のルールでは20cm以上でない計量の対象とはならないので、ある程度の大きさのサイズをそろえるにはそれなりに深い場所を狙う必要がありそうだ。



**見事大会を制した、中川・市毛組**

まず、出船してすぐ星湖亭のある位置とは対岸の位置へと向かう。しかし、北西は水質が悪く赤潮が発生しており魚影が見られない。すぐに場所を移動し、ウイードやリリーパッドをミノーやスピナーベイトで攻めるが、やはり反応はなし。周りの状況を見てみると、ノーシンカーで数は出ているようなので、こちらのボートもノーシンカーに切り替え。ゲーリー3”のクラブや4”カッター、木崎湖仕様のシャッドシェイプを流してみるが、なかなか食ってこない。そこで、ゲーリーヤマモトの2”ヤマセンコーをワッキーリグでセットし、岸際に落としていくと早速ヒット。まずは15cm前後のスマールをキャッチした。その後はストラクチャーの際や群れの中にキャストしていき、スマール・ラージ共に十分な数を釣ることができた。サイズアップを狙いディープも攻めてみるも、全く反応がない。

15時、ウェイイン。結局サイズアップを図ることができず、僕たちのチームは最下位となってしまった。全体的にもサイズは小さかったようで、優勝チームでも300g台だったが、多くのバスをキャッチ出来たことは素晴らしい夏の思い出となった。またバスが成長する所に再挑戦できればと思う。

## ~~~~夏合宿写真館2009~~~~



柴さんの「合宿開始！」の合図を待たずして釣りを開始してしまう多田くん(笑)そして、最初は、そんな多田くんを「こら！フライングしてんじゃねえ！」と叱っていた柴さんも・・・並んで釣りを開始してしまうのであった(笑)

柴さんの指導のもと、初めてのバスを釣りあげた小野君、何とも言えない笑みを湛えています。この後もけっこう釣れたようで眩しい笑顔が絶えませんでした(笑)



こっそりと大物を仕留めていた柴さんの図。

ルアーを変えたらすぐに釣れました、とパワフルな魚に大満足の中川君。海に加えて淡水、釣りの幅が広がって嬉しそうでした。



夏でも冬でも万年半ぞでの芹澤隊長は、お気に入りのルアーで粘って一匹！「釣りたいルアーで釣ってなんぼ！」ごもっとも(笑)



## 思い出の釣行

釣り人たるもの、誰しもが忘れえぬ釣りの思い出を、胸に忍ばせているものである。釣りの話をする時は両手を縛っておけ、などというロシアの諺があるけれども、手を広げて嬉々と釣り上げた魚の思い出を語る釣り人の得意顔には、何にも例えがたい純真さを感じる。ここでは我が慶應釣魚会メンバーの忘れられない釣りの Sweet Memory を紹介する。

### 柴

秋らしいさわやかな日が続く、週末は晴れの日が多いが、つい先日まで汗ばむほどの陽気だったのに、そろそろ冬の気配もする。北陸では、ちょうど今ぐらいの時期から黒鯛のウキフカセが面白くなる。大学では、後輩に釣りを教える立場にある僕だが、地元に戻ればまだまだ教わる側にいる。特にフカセ、前打ち、がそうだ。

富山には全国でも有名な、高岡チヌ研究会というクラブがある。年間を通じて各種競技を行事としており、競争を楽しみながら釣技向上を狙いとする、競技志向の戦うクラブであった。毎年、クラブ内から全国トーナメント上位入賞者を輩出し、大手釣具メーカーとテスター契約をしている人もいた。高校時代の二年間、そこに所属していた。といっても、チヌ釣りは、多くの道具を必要とするため、車がなければ釣りが成立しない。縁あって、僕はそこに準会員として招かれた。

「最初の一年は全然釣れなかったよ」と、入会当初は先輩方によく聞かされていた。ところが、僕は逆だった。「最初の一年はとにかく良く釣れた」。初め

て参戦した夏の例会で非公式ながら一位をとってしまった。「君には大物師の素質がある、技術や経験に関係なく、魚を呼んじやうものだよ」とまで言われて、すっかり上機嫌だった。

しかし、一年を過ぎたところから、それまでの釣果がウソのように、魚が釣れなくなる。そうやって初めて、釣技について真剣に考え、それまで以上に先輩方の教えを請うことになった。

「おまえ、何その投げ方？ちゃんと振りこまんなんダメやちや（バシツ）」  
「え？ウキ止めゴム？こんなもん使ったらアカンよー（ポイント）、なんけー、この変な結び（フチツ）、軽ウキ？ダメダメこんなの（ポイント）」。  
いろいろと捨てられた。つまり、僕はそれほど無知で、無駄の多い釣りをしていたのだ。それにしても、傍若無人というか、なんというか、すごいキヤラばかりであった。

それからというものの、僕は多くのことを学んだ。思い出に残る釣行も沢山あった。初夏に、能登半島から沖の地

磯へ渡った時のことはよく覚えてい。雷と豪雨、荒波の中、人ひとりが、やつと乗れる程の岩に取り残され、渡船に身をはねられる、命の危険を感じた唯一の釣行だった。大自然の中で人は、なんて無力なのだと思つた。

その後、大学進学 of 都合で、僕は退会することになったのだが、今思えば、あの時ほど、釣りに対して真剣に考えたことはなかった。

大学にはいつてからは、釣魚会の再興を通じて、自分の中にある釣りへの情熱を、あらためて感じる事ができた。四年間は、釣りの会をつくるには充分だったが、満足のいく釣りをするにはあまりにも短い時間のように思う。青年老いや早く学んだりがたし。どうやら釣りでもまったく同じようだ。

## 市毛

「幡台の用水路！K君がでつけえ鯉を見たつてよ！」「用水路の主かな！放課後、かめやの前集合だな！」

この会話が僕の釣り人生の始まりだったと思う。当時の僕はまだ小学2年生。田畑に囲まれた静かな農村、友達と日々好奇心を野山に走らせていた。放課後、地元の駄菓子屋「かめや」に集合したのはおなじみの4人。さっそく例の用水路に行き、搜索を始める。どれ程の時間が経過したのか、遠く先、友達のKくんが大声で騒いでいる。皆で駆け寄ると、今まで見たことのないような巨鯉が泳いでいた。今にして思えば50センチ程度だったろうが、小川の小鮒やハヤに見慣れていた僕らにしてみればとてつもない大きさだった。その時の僕らの装備は虫取り網、バケツ、ロープ、なぜかハサミ。当然魚が獲れるわけはなく、苦渋を飲むこととなる。

それから毎日だ。4人で集まって用水路に通った。学校が終わればすぐ家の畑へ行き、生ゴミ置き場の下からミミズを獲る。K君がなんとか用意した釣り竿を囲み、みんなで巨鯉を狙う日々。釣れる魚はハヤ、カワムツ、アブラハヤ、ウグイ、フナ、カジカ、ナマズ、等々、実に多種多様だ。魚が釣れることが面白くなり、誰

が竿を握るか大喧嘩。当初の目的はどこへやら、だ。月日が流れ、気がつけば4人全員が自分の竿を持ち、用水路に竿を垂れていた。けつきよく巨鯉は釣れなかったが、全員が釣りの魅力に取りつかれていた。魚がいると聞けば、隣の溜め池だろうが自転車で竿を担いだ。水がある所を見つけると魚はいないかとのぞきこみ、竿を垂れた。誰も知らない秘境を探して源流まで登ったこともしばしばだ。自然の中、好奇心のままに魚だけを追い求める、そんな青春時代であった。

私の現在。勉強、バイト、私生活のあれこれ・・・忙しい毎日に追われる生活である。コンクリートに覆われた道、無機質な建造物の羅列、夜の無い街。そこからは雨が降っても土の香りが漂ってくることはない。都会なのだ。今もこの先も僕はこの都会で埋もれてゆくのだろう。そんなことを考える度、魚を追いかけ野山を走り回った日々、あの幸せを愛しく思う。

## 飯田

一番の思い出の釣行は、人生初めてのエリア釣行でもありました。

釣魚会に入会して二回目の釣行。二〇〇八年初夏、よく晴れた空の下での開成フォレストスプリング。その時のタックルは釣魚会からお借りしたロッドと持ち合わせのリール。そして釣具店で何気なく購入した六色のスプーン。そのスプーンは今でも愛用しているNOAの1・4gでした。

釣り初めてから二時間、ようやく最初のトラウトがヒット。生まれて初めてのトラウトは小さなレインボーでした。それからさらに数時間後、日も傾き終了時間が迫る中、突然大きく竿がしなり勢いよくラインが出て行きました。十五分ほど粘り、六十cmに迫るレインボーを釣りあげました。完全なビギナーズラックでしたが、最高の1尾でした。あの1尾の喜びを越えるために、今後も釣りを続けていきたいです。



## 松井

あれは確か僕が小学生の高学年のころだったかと思う。プラモデルにはまる少年のように、電車にはまる少年のように、(事実僕はどちらにもハマっていた)僕はスーパーに並ぶ魚にハマった。あのフォルムが何とも言えないほど魅力的で、母親の買い物について行きたびお菓子コーナーでなく鮮魚コーナーへと走っていった。ビニール包装越しに魚の目や体をプニプニとつついては、パートのおばちゃんによく怒られたものだ。スーパーに並ぶ魚の名前を全て覚えたころ、僕はそれだけでは我慢できなく

なった。そんな僕に母はポケットサイズの魚  
 図鑑を買い与えてくれた(今でもその記憶の  
 おかげでたいいていの魚の名前はすくわか  
 る)。受験勉強で英単語や歴史の単語を覚え  
 るときのような苦痛は全くなかった。図鑑を  
 読んでいるときは至福の時だった。いつぞや  
 祖母に行きつけの魚屋に連れて行ってもら  
 った時、店頭に並ぶ全ての魚の名前を言い当  
 てる、魚屋の大将に褒められた時はすごく気  
 持ちよかった。

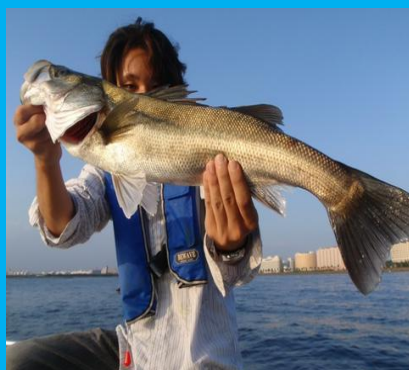
だが魚に関する知識がいくら増えても、何か  
 が足りなかった。実際に生きて泳ぐ魚を見た  
 ことも触ったこともなかったのだ。結論は簡  
 単だった。「ばあちゃん、釣りしたいねん！」  
 すると、祖母は知り合いの鈴井という人に頼  
 んで、僕はその人と初めての釣りに行くこと  
 になった。近くの野池での釣りだった。鈴井  
 のおっちゃんが貸してくれた竿はリールも  
 付いていない3mの只のカーボンの竿。仕掛  
 けは適度にラインを結びウキとハリをつけ  
 たもの。餌はうどんにサナギと呼ばれる粉を  
 つけたものだった。自分が想像していたもの  
 とは違い、あまりにも原始的にみえたため、  
 本当に釣れるのか不安だった。

しかしそんな不安を裏切るかのように大  
 量のブルーギルが釣れた。餌を垂らすと一分  
 もしないうちにかかった。釣果は確かブルー

ギルが釣れた。餌を垂らすと一分もしないう  
 ちにかかった。釣果は確かブルーギル30匹。  
 もちろん子供の僕は親の反対を押し切り飼お  
 うとした。ゴミバケツに水道水をいれブルー  
 ギルを入れた。すると10分もたらずに全滅  
 してしまった。バケツの中は地獄絵図みたい  
 であまりにも強烈だったため、思い出のある  
 釣行だった。



**矢上川で80オーバーの鯉  
を釣りあげた市毛くん**



**初めてのポートシーバスでナイ  
スワンをキャッチした土田くん**

## 池田

私のはじめて釣った魚は鯉です。友達に誘われて早朝から  
 近所の川に行きました。川のせせらぎと小鳥のさえずりと、  
 家の近くにこんなステキな場所があるのかとうれしく思い  
 ました。しかし見よう見まねで竿を上げてなかなか釣れ  
 ず、数時間たちました。えさのパンも最後の1かけとなって、  
 「奇跡よおこれ☆」と念じると、本当に釣れたのです!!そ  
 れも大きな立派な鯉がトそれまでの少し退屈な数時間がい  
 っぺんに吹っ飛んで、とても満たされた気分になりました。  
 初めての釣りのでつりの楽しさを知ることができた私は幸  
 せだと思えます。

## 土田

あれは小学校低学年の時でした。学校の課外学習で訪れた  
 群馬県の赤城林間学園で行った釣りが私の人生初釣りです。  
 施設の周りは緑豊かな山々に囲まれ、大自然を感じるに  
 はもってこいの場所です。しかしながら、肝心の釣り場はと  
 うと明らかに人工の釣り堀(笑)。たくさんの泳いでいる  
 魚達が丸見えで、皆すぐに釣れるだろうと期待してしまっ  
 げなかな釣れず・・・それでも粘りに粘って最後にヤマ  
 メを釣った時は感無量。いまでも鮮明に覚えています。これ  
 が釣りの難しさと面白さを知った私の人生初釣りでした。ち  
 なみに、ゆとり教育の弊害か不景気が原因かわかりません  
 が、現在はその赤城林間学園での釣りの体験は終了してしまっ  
 たみたいで残念でなりません。私に釣りの魅力を教えてくれ  
 た釣り体験、是非後輩にも味わってもらいたいものです。



## 多田

今でこそ、より大きな魚をとるための最新鋭のタックルに焦がれ、ショーケースに張り付いている釣りバカの仲間入りを果たしたわけだが、私の忘れられない思い出の釣りとは、いわばそれとは対称の非常にプリミティブなものであった。それは私の浅い釣り人生において最も古い記憶、浅川の小魚釣りである。実家の近所に溪流釣りの名人がいた。高校で教鞭をとっていた、物知りで駄洒落が好きな気の優しいおじいさんであった。同じ話を幾度と繰り返しという老人特有の性質を余すことなく持ち合わせたおじいさんには、岩魚・山女釣りの自慢話を何度聞かされたか、しれない。「同じ季節のうち、あるときものすごい数の岩魚を釣って得意になって、少ししてからまた行ってみると今度はまるで魚が釣れなかった。上流で工事があつたか、などいろいろ考えたけどわからないときもある。ただ岩魚はなにもいわない」私は彼を岩魚先生と呼んだ。ある日私は岩魚先生につれられ先生のお宅へお邪魔した。

おもむろに先生は庭の山吹を切り、竹串をもって山吹の芯をびゅっと押し出した。これにマーカーを塗って目印にするのだ、と先生はおっしゃった。竿がないよ、と私が言うと、裏山からいい塩梅の竹を探そう、といった。私は釣り

という最も崇高な哲学を実現させた古い人々の工夫に想いを巡らせ、その偉業を讃えた、というと俗物的な誇張になるのだが、子供ながらにひどく感心したのを覚えている。ハリスは先生が持っていたのをわけてもらった。これで道具がそろった、餌を買ってきます、と色めき立って飛び出さんとすると、先生はそれを制し「餌ならそこら中にある。おいで」といって、ざぶりと川をわたり始め「こうして水が、ざあざあど落ち込んでいるところをみてみなさい」と私に生徒に対する口調で話しかけた。「流れが岩にあたって混ぜつかえって、泡がたっているだろう。虫はそういうところにいるのだ。呼吸ができるからさ。そらみる、川虫だらけだ！これがピンチョロ、カゲロウの幼虫だ。このひらひらを見ると魚が涎をたらしてすつとんでくる」先生は岩をペロリと舐め、ピンチョロを口に含み、濡らした軍手に吐き出した。ぬらしていると餌は死なずに長持ちするのだ。私も得意になって餌を取った。

それから竿の振り方、餌の流し方、アタリの取り方などを先生から学び、その日は結局クチボソ、ハヤ、ウグイなど20以上の小魚を釣った。いつか溪流で岩魚や山女を釣りに行こうと約束をした。

それから10年以上たった今、岩魚先生はご高齢でその約束を果たすことは難しくなってしまった。しかし先生が私に教えてくれた創作する楽しさ、そして冒険の記憶は今でも瑞々しく生きている。

## 吉田

中二の冬だったと思う。クラスの友達に初めて釣りに誘われた。週末早起きして釣具屋の自販機でアオイソメを買って、釣り場へ。寒くて手がかじかみ釣り糸は上手く結べないし、アオイソメは気持ち悪いし噛みつくしで、友達に手伝ってもらって、というよりほとんど友達に仕掛けを作ってもらっての初釣りだった。その日はみな夕方までさっぱりで、他愛ない話をして時間を潰した。日没直後、そろそろ帰ろうかという時間になって友達の手が当たってきた。少し時間を置いて、私の竿にも。たしかウミタナゴだったと思う。続々と他の人にも当たってきた、真つ暗になっても釣りは続いた。

結局、ウミタナゴやカサゴなど、三匹ほど釣ったと思う。帰りにコンビニで買った缶コーヒーと肉まんが、冷えた体にやけに旨かったことを覚えている。



葉山！カツオ！多田くん！  
7魚種程釣れたそうなの

## Angler 柴 NORIES クリスタル S



僕のゲーム構築で、絶対に欠かすことのできないルアーが、このクリスタル S。スタンレーから D ゾーンまで、これまで多種多様なスピナーベイトを使ってきたけど、一番はやっぱり、クリスタル S オリジナル 3/8oz。とにかく良く釣れる。ファインワイヤー、クランクワイヤー、V ブレード等々の装備も注目ですが、泳ぎ、すり抜け、巻き心地、フッキング率 etc とにかくトータルバランスに優れていることが、クリスタル S の最大の武器だと思います。初夏の木崎湖では、タイニークリスタル S(1/4oz)のスタンプ打ち

で、多くのスモールマウスを仕留めてきました。スピナーベイトの釣りでは、バイトがあっても乗らない、といったことをよく耳にしますが、深いバイトを得ることが可能なのも、このクリスタル S の特徴です。

## TIFA セミラ

木崎湖がホームグラウンドな僕のお気に入りの一駒は、TIFA のセミラ (廃盤)。田辺哲男の発案で、国内で最もオシャレなルアーブランド TIFA から、もう 10 年以上前に発売された、知る人ぞ知る、オールバルサ製のポッパー。ヒトコトで言うなら「時代を先取りし過ぎたルアー」。今でこそスモールマウスにおけるテレストリアルな釣法は有名だけど今から 10 年も前は“虫パターン”なんてコトバ自体存在してなかったし、雑誌等で紹介されることもなかった。そんな時代に、いち早く、初夏のパターンフィッシングの持駒として、セミをイメージして造られたのがセミラだ。



田舎で過ごした中学時代、絵画展で東京に行った美術部の先輩に、無理言って買ってきてもらって、それ以来、大切なルアーとしていつもタックルボックスに入れてある。バルサなので飛距離はだしづらいけど、着水音が「ポチャッ」と美味しそう。夏の夕暮れに何度も良い思いをさせてもらいました。

## POE'S セダー100,400



ハードベイトゲームには欠かすことのできないクランク。僕のお気に入りには、POE'S のセダー。80,90 年代、リック・クランクがこのセダー400 を使って、米国トーナメントで頂点を極めたと言ってよい程に、勝ちまくっていた。ここ数年は、アメリカ製のクランクも、日本でよく見かけるようになった。ただ、ウィグルワートだとか、マンズは日本仕様に改良されて売られているのが悲しい。このセダーは違った。製品ごとにバラつきがあり、ハズレを買うと泳がない。だから、いくつかまとめて買って置いて、魚の食わせグセをつけたやつだけをボックスに入れておく、なんてことをしていた。セダーウッドが生み出すプリプリとした動きは、ステインウォーターで杭なんかのストラクチャに絡めて釣るのに最適。ただしウィードはダメ、団子になっちゃいますから。

## Angler 土谷

ヨーヅリ スラブコバグ



最初の出会いは、12年ほど前に山形の釣具屋さんで埃をかぶって乱雑に置かれていたときのことでした。プラスチックのボディに羽がついた独特の形状に惚れ、即買いしたルアーです。アシ際ギリギリにキャストし、ノーアクションでドリフトさせていると、黒い影が下からヌウと現れて、バシヤッと飛びついてきました。虫ルアーなどが流行るはるかに前の話で、「早すぎた天才」系のルアーでしょう。プラグに羽をつけるというセンスにはただただ脱帽です。しかし、このルアーの素晴らしいところは、ただ巻きした際のスイミングバランスもとても素晴らしい点にあります。ドリフト時にバイトがなく、回収しているときにガツンと食いついてきたこと

が幾度もありました。人工物のプラスチックのボディと、自然物である羽との、ある種のアンバランスさが特有の水流を生み出していたのでしょうか。今ではほとんど使うことはありませんが、数々のバスを釣らせてくれ、歯型でボロボロになったこのルアーは、僕にとってずっと一番のお気に入りです。

## Angler 多田



### ジッターバグ

私が一番好きなルアーは、ルアーマンなら誰もが知っているであろう、ノイジープラグの不朽の名作ジッターバグだ。そのユニークなデザインはまさに偶然によって生まれたものである。元々のモデルがフローターダーターとして生産したものの、ひっくり返って浮いてしまう、という欠陥が発覚したために、発売に至らなかった。アーボガスト氏はこれをひっくりかえして逆にフックを付け、トップウォータープラグとして使うアイデアを思いついた。このアーボガスト氏のパラダイムシフトにより、あの水面をパタパタとウォブリングするアクションが生まれた。朝まずめ、タックルボックスから取り出さず投げたいのはジッターバグ。夜、聴覚で楽しむジッターバグ。とにかく投げて巻きたくなる不思議な魅力を持ったルアーだ。

このルアーはそのアクションや釣果だけでなく、チューンする楽しさを与えてくれる。フロントフックを外し、ブレードを付けて波動やフラッシュアピールを与えてみたり、リアフックにスプリットリングを2つほど嘯ませてフッキング率の向上を図ってみたり、カップの角度を調整するトゥルーチューン、など様々なチューニングを施して釣行に臨む。実釣後、チューンの評価・改善をする工程も楽しい。

偶然と一人のルアー職人の発想により誕生したジッターバグは、1938年に登場してから70年以上たった今でも多くのアングラーに愛され、水面で“ジルバ”を踊っている。

釣魚会の活動の中で、TOPウォータールアーで釣れたフラックバスです。右は多田くんが釣りあげた超絶シーバスちゃん☆衝撃の90オーバーです！



## Angler 市毛

## インビンシブルJ

ラバラといったら言わずもがな、世界的に有名なブランドである。しかし、日本で人気が無いというだけで、他にも世界的ブランドは多々ある。今回僕がお気に入りとしてあげるルアーはそんな世界的ブランドの一つ、ニルズマスターが出しているジョイントミノー、インビンシブルJだ。ラバラといえば言わずもがな、世界的にも有名なブランドである。しかし、日本で人気が無いというだけで、他にも世界的ブランドは多々ある。今回僕がお気に入りとしてあげるルアーはそんな世界的ブランドの一つ、ニルズマスターが出しているジョイントミノー、インビンシブルJだ。



ニルズマスターは、北欧はフィンランドの出であり、バルサミノーが有名。海外ではラバラより優れる、とまでおっしゃる方もいるとのこと。実際僕はニルズマスターの方が好きである。

さて、お気に入りジョイントミノーのインビンシブルJについてであるが、独特なのは扁平ボディと魅力的な瞳。まるで子供の玩具である。店頭で出会った瞬間にその存在感に魅入られてしまった。

当時コレクションとして購入したのだが、近隣の河川で泳がせてみたところ、これまた動きがかわいい。うねうねと表層直下をもがく様子は子供がダダをこねる様。この愛らしい動きもお気に入りの理由である。

そして僕がこのルアーを愛する1番の理由は、魚が狂ったようにルアーを襲う瞬間が目視できるということである。理由は分からないが、このルアーに興味を持ってしまった魚の大半はルアーへ猛突進。下から脇から真上から、思い思いの襲い方でルアーへアタックしてきてくれる。しかも潜行深度が50センチ程度なので、魚の襲撃シーンはバッチリ楽しむことができる。実際、購入当初は釣果の程は期待していなかったのだが、川で使ってみれば鯉がルアーへ猛突進。野池へ赴いた際にはブラックバスも異常な好反応で数匹キャッチ。トラウトに関しても、エリアトラウトではあるが、鹿島槍ガーデンにて20数匹を1日でキャッチしてくれた。ルアーを見ると狂ったように突進してくるトラウトにこちらも大興奮である。

以上のような、ルアーのフォルム、アクション、実釣の楽しみ、これらの魅力に僕は心底魅了されている。タックルボックスを開けばいつでも入っている、そんなルアーになりそうだ。



鹿島槍ガーデンでイトウとビッグフラウンをゲットした市毛くん。  
インビンシブルJでもたくさん釣れたようです。

以上、魚や道具への思い入れ。KFCメンバーの釣りへの熱き思いが伝わったかと思う。

いうまでもなく、釣りは私たちの生活に深く癒着するもので、私たちにとってなくてはならぬものだ。しかし今、釣りというものの負の側面にも目を向けねばならない。環境の汚染、水質汚濁、それに伴う釣り人の減少、マナーの問題など我々にとって解決していかなければならない課題は山積している。そこで、次頁からはそれらの問題についてのメンバーそれぞれの持論を紹介していこうと思う。

## 釣り人気拡大のために 中川俊哉

釣りを過去にやったことがあるという人の割合は結構な割合で存在するものの、釣りが好きで趣味の域まで高めている人というのは意外と少ない様な気がする。釣り好きを増やすには何が必要なのであろうか。

まず釣り人口というのは一体全国でどれくらいの数存在するのであろうか。「財団法人 社会経済生産性本部編 レジャー白書2007」によると、平成18年度は1290万人、およそ10人に1人が釣りをやっていることになる。思いのほか多い(!)。

平成10年のピーク時には2000万人を超えていたことから考えると大分減少していることが分かるが、未だに根強い人気を持った趣味であることには違いがないだろう。

その中で特に着目すべきなのは、女性釣り師の数である。50、60代での女性釣り師の数は極めて少ないが、一方で10、20代の数はその7倍以上いるのである。その背景にはルアー釣り等による参加の容易さというものがあるのではないか。エサ釣りにおけるゴカイやブドウ虫等の気色悪さが釣りをする上で大きな障壁になっていると思うが、ルアー釣り等によってそのようなイメージが払拭されつつある。

また釣り施設を美化したり、トイレを設置することで釣りをしやすくしている事も女性の釣り人口拡大の大きな要因であろう。釣りの面白さを訴えるだけでなくそうしたハード面での整備が今後必要になってくる。

次に必要なのは釣りスクールの設置である。中学生の頃神戸の海で釣りをしていたとき、横にいた老人が声をかけてくださり、半日近く面倒をみてもらった事がある。エサのつけ方からタナ等事細かく教わった。そうした釣りを教えてくれる人の存在というのはとても貴重である。

釣りを教えることに意欲的な人を指導員として組織化して、例えば「今週はA堤防に居ますので初心者の方が来れば教えます」といった機会を増やすことができれば、身近に釣りをする人が居ない為に始められない人にとって、いい機会になるだろう。

最後に必要と思うことは釣りをする人たちの意識の向上である。小さい魚まで根こそぎ取っていくようなことがあればそこに居た魚はすぐに減少してしまう。ゴミを釣り場に捨てていく人がおおい為に、海川を汚すだけでなく、釣り場の閉鎖・禁止を招いている。

周りでみている人にとって釣り人がマナーの悪い人間に移る事は決して好ましいことではない。長年釣り人のマナーに付いては議論されてきたが、なかなか改善されない状況であるの中で、釣りをする一人一人の意識の向上が釣りに対する評価につながり、同時に自分達がより楽しむために必要なのではないかと感じる。

## 「立ち入り禁止」と釣り人のモラル 飯田 裕晶

2009年12月、茨城県鹿島港で釣り人3人が波に流され命を落とした。3人が流された堤防は「立入禁止」の文字が書かれたフェンスの向こう側だった。この堤防では着工以来、波が大きくかぶることがあるため、危険だとして立ち入りを禁止されていた。それにもかかわらず、これまでの約30年間にこの場で65人の人々が尊い命を落としている。世間の人々はこうした釣り人たちに対し、非難の声が向けられた。立入禁止の場所で釣りをして死ぬのは自業自得 — もっとも、このような意見は至極当然だ。だが、釣り人の中には自分の身を危険に晒してまでも魚を追い求める人もいる。とあるネット上の掲示板では、このポイントは「良く釣れる」とまでも紹介されていた。自分の命を失うリスクと、未知の釣りとの遭遇というリターンを天秤にかけた結果、危険を冒してまでもこの堤防に通う人たちはその大きなリターンに絶大な価値を見出したのであろう。

立入禁止となっている場所には、それなりの理由がある。今回のように危険な場所であったり、私有地であったり、はたまた自然保護のためであったり。それを彼らは理解した上で立入禁止を破っている。見たこと

ない大きな魚や大量の魚を釣り上げることは、釣り人たちにとって永遠の夢であり、その夢をつかむためならば「立入禁止」を無視することなど、容易いのもかもしれない。

だが、彼らの行動は本当に正しい判断であったのだろうか。立入禁止の場所は人が少なく、プレッシャーも少ない。魚が釣れるのは当然だ。しかし、それはある種のルール違反を侵しているのと同義ではないだろうか。スポーツの世界にドーピングという言葉がある。薬物を使って自分が出せる以上の力を引き出すということだ。薬物を使うことはフェアではないし、最悪の場合は選手の命にかかわることになるため、ほとんどの場合ドーピング行為は禁止されているし、ドーピングを使って出した記録は真の記録としては認められていない。釣りにおいて立入禁止の場所で竿を出すことは、いわゆる釣りのドーピング行為であると思う。立入禁止区域でどれほど大きな、あるいはどれほど多くの魚を釣りあげたとしても、それは明らかなルール違反であり、自身の記録としてカウントしても良いということにはならない。

我々釣り人は漁師ではない。生きるために魚を釣っているわけではない。趣味やスポーツとして釣りを楽しんでいるにすぎない。それならば魚を釣ることよりも、まずは優先して自分のことや周りのことを考えるべきではないだろうか。法律はあっても、釣りというものの自体に明確なルールブックが無い以上、試されるのは我々釣り人のマナーとモラルである。

### It's a small war 多田翔介

野池は小さく足場も良いし、各地に点在しているために手軽に訪れることができる。私が中学生のときは近所の池に通い、ブラックバスを釣ったりザリガニを釣ったり、はたまた釣ったザリガニをむき身にしてクチボソやフナなどを釣った。この野池には、他の野池にも容易に見る事ができる、ヘラ師とバサーの分かりやすい対立構造があった。この二大勢力はお互いを軽蔑し合っており、静かな野池における冷戦が続いている。お互い滅多に言葉を交える事はなく、ときたま見苦しい小さな火花を散らせているのである。そこで私なりに、この知る人ぞ知る野池紛争を分析し、お互いの妥協点を模索したい。私の知るところ彼らのお互いに対する主な主張は以下のようなものである。

ヘラ師、曰く「バサーはマナーが無い・バシャバシャ五月蠅い・あんな外来種釣って何が嬉しい」

バサー、曰く「ヘラ師は場所を全て陣取る・バスを虐殺する・餌釣りなど古くさい」

ヘラ師とバサーの言い分交互に考えていきたい。まず「バサーはマナーが悪い」これは一部の心ない人達が植え付けてしまった偏見に他ならない。ラディカルなテロ行為に走る一派が原因で、「残虐である」というレッテルを張られてしまった宗教に類似する。バサーはこれに対し、イメージ払拭のための努力（ゴミ拾い）が必要で、ヘラ師は理解が必要である。次にバサーの主張「ヘラ師は場所を陣取る」というものであるが、これは先着順で成立した配置であるはずで、横入りなどは行われていないはずである。この主張は自分勝手に打ち捨てられるべきである。さて次はヘラ師の「バシャバシャ五月蠅い」という言い分であるが、これは釣りの性質上致し方ないところである。自分のする釣り以外に対する理解がヘラ師には必要ではないか。もちろんバサーもヘラ師の仕掛けの周辺にはキャストしない、サミングを心がける、などできることはある。「バスを虐殺する」この主張は目新しかった。私は見た事が無い。これも一部の心ない人の行為が火種で広まった話かもしれない。しかし事実バスは特定外来種であり、駆除するべきだ、と考えているヘラ師も少なくないだろう。これは非常にセンシティブな問題で難しい。一時期大きな問題となったバサーのバス密放流などの印象が尾を引いているのかもしれない。しかし生命には罪が無く条例などで正式に決まったことでない場合、一釣り人が無下に魚を殺すということはあるべきではない。もしヘラブナをスレがかりで釣ったバサーが、ヘラブナを陸に放置でもしたら、烈火の如く糾弾するに違いない。釣り人たるもの魚を愛している。これはどんな釣り人をもつなぐ共通項なのである。最後に三つ目の主張はお互いに似通っている。簡単に言うと、「あんな釣りつまら

ないだろ」というものである。私はこの冷戦を引き起こしている諸悪の根源がこの考え方である、と思っている。そこで一つ私の通った野池での話を紹介したい。

私は友人ふたりとバス釣りをよくしていた。ヘラ師がよくフナを釣っているのを見ながら、自分たちはバスを釣っていた。私たちは好奇心で彼らに話しかけた。すると明るく接してくれ、お互い目には挨拶を交わす中になった。そしていつか私たち彼らの道具を借りてヘラブナ釣りを教わった。それは非常に貴重で新しい経験であった。この釣り教室を通じてさらに仲良くなったので、今度はお返しにバス釣りをヘラ師の方々に教えて上げた。しばらく教えると彼らもバスを釣り上げた。そのときヘラ師もやっぱり嬉しそうであったのである。私たちはそのヘラ師の一人Uさんの名前を取り、密かにその池をU池と名付けた。

ヘラブナ釣りにはヘラブナ釣りの面白さが、バス釣りにはバス釣りの面白さがある。紛争を引き起こす要因は国家間であれ、はたまた小さなコミュニティ間であれ、いつも複雑である。しかし釣り人同士、お互いの釣りの面白さを知る事で、無意味なバイアスから生じる紛争を幾分防ぐことができるのではないだろうか、と私は考えている。

## 日本の釣りを守ってゆくには 市毛慎也

日本の釣りは衰退してゆくのではないか、という危機を感じている。釣り人口は減少の一途をたどり、自然環境の破壊は魚達の存続を脅かしている。釣り人口は、平成10年に2000万人以上存在したが、その7年後には5割減に相当する約1000万人にまで減少した。娯楽の多様化により釣りを趣味とする人が減ったことに加え、子供達が「うち遊び」をより好むようになったため、若年層の釣り人が減少したことも大きな原因の一つである。そして、自然環境の破壊も顕著であり、私の実家では魚が住めなくなってしまった河川が多数存在する。林業が衰退したことで森林は荒廃し保水能力が低下した。そこに一度雨が降れば山から大量の雨水と土砂が川に流入し、川の環境は変化してしまう。さらに、保水能力が低下したことで、山は川に安定して水を供給することができなくなり、川はやせ細る。川の環境が激変すれば、餌の減少や住み家の消失など、魚の生態に悪影響を及ぼすのは当然のことだ。他にも、河川のコンクリート化、家庭や工場からの排水による水質汚染、外来種の違法放流など、様々な環境破壊により魚達は減少の危機に瀕している。

釣り人口の減少、環境破壊による魚の減少は、それ個々でも十分な問題であるが、この二つが一緒になって起こる問題を私は危惧する。それは釣りを守ってゆこう、次の世代に伝えてゆこうという流れの弱体化が、日本の釣りの衰退をさらに助長するということである。釣り人口の減少は、釣りのできる環境が減少すること、次の世代の釣りの可能性が奪われることを危惧する釣り人の減少である。それは、日本各地で行われる自然破壊に対抗する抗議の声や、釣り環境保全のための行動や組織の規模縮小につながる。つまり、釣り人口の減少が、釣り環境保全の動きと釣り環境の減少を引き起こし、そしてまた釣り人口の減少につながってゆく、という負のスパイラルが発生しかねないのだ。この問題に対して、僕たち学生釣り人ができることがいくつかあると考える。それは、同じ学生釣り師達が密に交流を持ち、意見をぶつけ合い、行動し、釣りを守ろうという大きな流れを作ってゆくことだ。一度壊した自然を直すことはできないが、守ってゆこうという意味を広く一般に伝えることはできる。学生は大学や高校という大きな集団に属しており、多くの学生に主張を伝えることが可能である。また、学生が集まり意見をぶつけ合うことはお互いの刺激にもなり、環境破壊に対抗する声をより一層大きくしてゆける。釣り好きの学生が集まって大きな集団となれば、組織として釣り環境保全の活動を盛り上げてゆくことにもつながってゆける。このように、学生の釣り人が密に交流を持つことが、日本の釣りを守ろうという大きな流れへつながり、日本の釣りは衰退ではなく発展の方向へ進んでゆける、と私は考える。

## 誰がために鐘は鳴る 柴 光則

釣雑誌なんかを読んでいると、びっしりカタカナの外来語が並び、一つも切れ目がないような文章がある。読みにくいこと甚だしい。最近の釣り業界では、カタカナと外来語が大人気ようだ。根魚と言えはいいのに「ロックフィッシュ」、「何にでも使える竿」と言えはいいのに「バーサタイルなロッド」。大阪に行った時、「パンション分譲」なんて言葉があることを知ったが、それにも比して、はあ〜けったいなコトバですねえ。カタカナ語の使いすぎはよくない。ある程度は「やまとことば」を混ぜたい。「古池や 蛙飛び込む 水の音」、「山椒魚は悲しんだ」やはりこうでなくては。

何が「やまと」で何が「外来」なのか、これはまた難しい。環境問題でも同じことが言える。ブラックバス等の外来種は、いわゆる移入種問題の一つに過ぎない。移入種それ自体は国内に昔から存在する。公魚なんかがそうだ。外来が悪いのではない、人間にとって害だから悪いのだ。「害」とは何を意味するのかが問題となるが、近頃ではブラックバスが生み出す経済効果と、ワカサギなどの内水面漁業収益、どちらが大きいかを天秤かける地方自治体も多い。

生物多様性という概念がより一層、この問題を複雑なものにしている。単純に多様であればよいのなら、移植放流なんかは、それ自体、種の多様性を高めることとなるので、良いことになる。一方で、内水面に固有の、本来的な生物多様性こそが維持されるべきだという考えもある。そこでの「固有」とは何を意味するのか。突き詰めれば、公魚だって鯉だって移入種なのだ。何が「固有」か、これもまた難しい。内水面周辺で経済的生活基盤、自主行政権を持つ人達の価値観によって、「固有」は簡単に変容してしまう。つまるところ、それは、個人の思想の領域の問題となってしまう。

今から5年前、外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）の第1陣リストにブラックバスが入ると決まった時、10万件を超えるパブリックコメントが寄せられた。釣り雑誌の誌面では、「胸を張ってバス釣りができるように！」「子供に釣りあげたブラックバスを殺せというのですか？」等といったことが盛んに叫ばれていた。不思議だった。己の認識論に固執し、それを正当化しなければ恥辱になるとでもいうのだろうか。魚を殺すのが可哀そうというのなら、そもそも、貴方のしている釣りは何なのか。本質を見失っているのではないか。バス釣りが大好きだからこそ、周りの釣人との意識の乖離を感じていた。

こういった問題は、とにかく感情面で語られることが多い。だが、解決にはもっと複眼的視点が必要だ。ブラックバスを観光資源・収入源として利用するのか、それとも駆除するのか。私の提案としては、地方自治体ベースで、経済財政政策国民会議ならぬ、「内水面適正利用市民会議」なるもの制度構築することだ。住民と行政 vs 釣人と釣り業界といったセクショナリズム的な発想をやめ、湖やダムで近づく経済的生活基盤を有する住民、市区町村・地方自治体を中心となり、内水面を利用する外部アクターとして、釣人や観客等も含めた住民会議を制度として構築する。その下に政策部局を置き、パッケージとして意見を確実に政策へ反映させる仕組みだ。

釣人として、個人のレベルで何か出来ることはないだろうか。思うにそれは、「志ある釣り」をすることだ。バス釣りに関して言えば、今のバス業界は少し間違った方向を向いてしまっている気がする。大切なのは、本来あるべき、魚を探す、自分が喰わせられる魚を探して、釣りをすること。そうではなく、釣り場のプレッシャーの上昇に合わせて、技術的な側面、喰わせることばかりが目され、釣り自体がどんどん小さくまとまってしまっている。それはバス釣りではなく、単なるルアー釣りのように見える。大会なんかでも、リミットが揃わなくてもいい、1本でも2本でもビックフィッシュ捕ってきて、それでしっかりスコアを出す釣り。現状に流されることない、そんな、しっかりした釣りができれば、日本のブラックバス事情も変わっていくのではないだろうか。釣人の皆が、プロになるわけではないが、各々の釣りを通じて、釣りのあり方、そして環境を良くしようと努力すれば、現状を変革することができるはずだ。

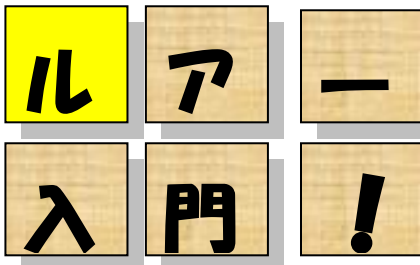


## 2009年度 KFC 年間行事記録

時期	内容	場所	対象魚
1月 ～3月	国際フィッシングショー09 見学 (2/14)	みなとみらい パシフィコ横浜	
4月	新入生歓迎釣行 エリアトラウト	FISH ON! 王禅寺	ニジマス、イワナ、 アマゴ、イトウ
7月	エリアトラウト釣行	開成水辺フォレスト ストスプリング	ニジマス、イワナ、 ヤマメ、イトウ
8月	KFC 夏合宿 (2泊3日) 1日目: ボートバス 2日目: エリアトラウト 3日目: バストーナメント	<長野大町市> 木崎湖 鹿島槍ガーデン 青木湖	スモールマウスバス、 ラージマウスバス、 ニジマス、ウグイ、 ブラウン、イトウ
9月	ボートシーバス	東京湾	シーバス
	コイ釣行	鶴見川水系	コイ、ボラ
10月	茨城遠征 オカッパリバス、エリアトラウト	茨城県 高萩ふれあいの里	ブラックバス、 ニジマス、イトウ
	海のボート釣り	三浦海岸	イナダ、ソウダカツオ
11月	ボートバス	千葉県 高滝湖	ブラックバス
	長野鹿島槍遠征 (1泊2日)	鹿島槍ガーデン	ニジマス、ブラウン、イトウ
12月	エリアトラウト釣行	FISH ON! 王禅寺	ニジマス、イトウ、 イワナ、アマゴ、

2009年度釣魚会の主な釣行です！  
このほかにもメンバー数名で行く個人釣行やOB会とのバーベキュー、新年会など釣り以外にもさまざまなイベントが行われています！

## KFC会報誌 番外編



「釣りはやってみたい！だけど何から始めればいいのか分からない。」

この会報誌を読んでくださっている皆さんの中にも、少なからずこんな思いを抱いている方もいるのではないだろうか。

そんな方のためにも、この番外編では釣りの基礎を簡単にではあるが解説していこうと思う。この編を読んで少しでも、「やってみるか。」「始めてみるか。」とっていただけたら幸いである。

釣りには大きく分けて、エサ釣りと疑似餌を使った釣りがある。疑似餌とは魚のエサとなる虫や魚などを模して作られたもので、モバリやルアーといえは聞いたことのある人も多いはず。ここではその疑似餌を使った釣りの基本を紹介しよう。

◆**タックル** . . . 道具一式のこと。ルアー釣りはそんなに多くの種類の道具を用意する必要はなく、最低限ロッド・リール・ライン・ルアーがあれば始めることができる。

- ① **ロッド** . . . 釣竿のこと。50 cm程度の短いものから3 mを超える長いものまで、釣りによって様々な種類がある。
- ② **リール** . . . ロッドにセットし、糸を通してルアーを投げ、リトリーフ（糸を巻き取る）するために必要。
- ③ **ライン** . . . 釣り糸のこと。釣りによっては、髪の毛程度のかかなり細いものを用いる。その細さゆえに下手をすると簡単に魚にラインを切られてしまう。逆に太いと魚に見破られてしまう。
- ④ **ルアー** . . . 魚のエサとなるものを模したものの。材質はプラスチックや木材、ゴムなど多岐に渡り、それを本物のように操り魚を釣る。こんなので釣れるの!?!と思うもので釣れてしまうから面白い。

◆**実践** . . . 道具が揃ったら早速ルアー釣りにチャレンジしよう。タックルを用意して、いざ釣り開始！

- ① **キャスト** . . . ルアーをポイントに飛ばすこと。竿先の反発力とルアーの重みで遠くへ飛ばす。
- ② **リトリーフ** . . . ラインをリールに巻き戻すこと。ルアーを漂わせるようにリールを巻き上げていき、神経を集中しアタリに備える。
- ③ **アワセ** . . . 魚に針がかりさせること。コツコツときたら、シャープに確実にアワセ、フッキングさせる。
- ④ **ランディング** . . . ヒットしてから自分の所へ引き寄せること。
- ⑤ **キープ or リリース** . . . キープは持って帰ること。リリースはその場で放すこと。リリースする場合は、なるべく魚に触れずにフックを外し、そっとリリースしてやる。

## ◆対象魚

- バス** . . . 貪欲かつ好奇心旺盛な魚で、色々なルアーで釣れる。
- トラウト** . . . 警戒心の強い魚で、繊細な釣りが求められる。主にスプーンと呼ばれるルアーを使う。
- シーバス** . . . 海のフィッシュイーターと呼ばれる魚。
- ナマス** . . . 川に棲む夜行性の魚。トップと呼ばれるルアーを使った釣りは非常にゲーム性が高い。

KFC メンバーには釣り初心者が多数います。これを見て少しでも釣りに興味を持ってくれたなら気軽に連絡をください！一緒に楽しく釣りを始めましょう！

## 編集後記

完成した「波紋」を読み返すと、2009 年度の活動は昨年度よりも活発で、何よりも楽しかったことが思い出されます。来年度はもっと楽しく充実した活動ができるような工夫を考え、同時にみんなで釣り技術の向上に努めたいと思います。(飯田)

皆さんの協力を得てやっと会報誌を完成させることができ、まずそのことを純粋に嬉しく思います。タイトルでもある「波紋」の文字通り、釣魚会の活動、雰囲気、なによりも釣りの楽しさをこの会報誌を通して皆さんに伝えていくことができたらと思います。(小野)

会報誌の編集を通し、「釣り」を文章にしてゆく中で、釣りの喜びを共有して語り合える仲間がいることの幸せを感じました。同時に、自分がどれ程釣りが好きなのか再認識しました。最後の学生生活において仲間と釣りができる素晴らしさ、存分に味わいたいと思います。(市毛)

このたび編集担当を努めさせて頂き、一つの物を作り出す難しさと仕事に付きまとう責任を思い知らされました。私自身は何もできず、ただ周囲に迷惑と気詰まりを提供しただけであったことを白状せねばなりません。本誌の完成にあたり感慨深く感じるとともに、このような機会を得た事、また協力してくれた周囲の人間に謝意を表したいと思います。(多田)

9年振りの発行となった「波紋 34号」。とにかく完成できてよかった。これも頑張ってくれた仲間と暖かく見守って下さった皆様のおかげです。本当にありがとうございました。また新たなスタートです。想いのこもった我らの「波紋」がこれからもつづきますよう。Keep Casting! (柴)



表紙写真: 青木湖 —2009年夏合宿にて—

背景原画(裏): 構成 柴 光則  
原画 澤田 知世 / XEBEC  
題 “Elegant Summer”

波紋 34号 2010年2月発行

「慶應義塾 釣魚会 波紋(はもん)」制作委員会

[chogyokai@gmail.com](mailto:chogyokai@gmail.com)



Keio Fishing Club  
KFC ADVENTURES 2009 波紋

禁無断転載・複製

